

東光原

熊本大学附属図書館報

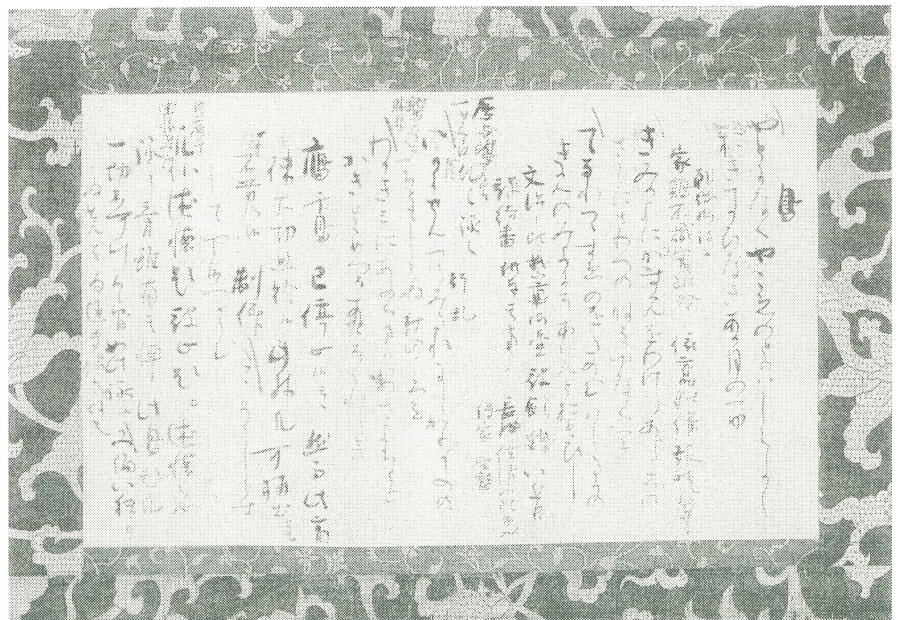
Kumamoto University Library Bulletin, No.13, Feb. 1996

● 旧五高所蔵のドイツ語学書について

熊本大学附属図書館寄託永青文庫の貴重書（一）

● 「俊成卿定家卿両筆」一軸

● 犬も相手にしないし猫も匂いを嗅がない



[II] 「俊成卿・定家卿両筆」

定家が「鳥」5首とその創作意図を注記して俊成の助言を請い、これに俊成が意見を記して返した勸返状。頭書きの細字と合点が俊成の筆である。

鎌倉初期。掛幅装。縦29.5センチ、横49.7センチ。

東京都・細川家永青文庫蔵。

(釈文は本文にあり)

旧五高蔵ドイツ語学書

上 村 直 己

熊本大学附属図書館の別館には旧制第五高等学校所蔵の図書が保存されているが、その中には英語・ドイツ語・フランス語など語学関係のものが多量に含まれている。旧制高校では語学教育に最も力点が置かれ、時間数も今の大学教養課程のそれよりはるかに多く、さながら外国語学校の観があった。五高の蔵書に語学書が多いのはそうした事情を反映している。ドイツ語関係では、明治・大正時代に我が国で使用された教科書や参考書の主なものは大体揃っている。これは特筆すべきことだ。この方面で最も多く所蔵しているのは国会図書館だが、古いドイツ語の教科書類を熊大ほど多く保存している大学図書館は他に余りないのではないかと思う。特に明治時代に使用された洋書に貴重なものが多い。以下概略を紹介しよう。

語学の勉強に欠かせないのは辞書であり、いかに辞書を上手に活用するかに上達の秘訣がある。それで日本でも明治から今日にいたるまで多くのドイツ語の辞書が作られて来た。日本の独和辞書の歴史は、独英の複数の辞書を底本とし見出し語・綴字・分節法・発音・語義解説・語法・用例等の情報を全部ないし殆どを依存し、訳語や訳述の様式を先行の独和辞書に仰ぐ、といった編集方法が普通である。明治10年代以後の独和辞書にその底本として使われた原書が殆ど揃っている。例えば明治を代表する辞書の一つである福見尚見・小栗栖香平編「独和字典大全」(初版・明治18年、国文社)の序文には「ホフマン、ハイゼ、ウェーベルを原書として、ウェーニヒ、ブロックハウス、マイエル等を参考にした」とあるが、それらのドイツ語辞書はHeyne や Sanders の辞書と共に全部揃っている。ほかにアドラー独英字典があり、ホフマン他国語字典もある。

最も多量に保存されているのは各種の読本(リーダー)である。明治前期にはまだ日本人が編集したものが稀であったので、ドイツから輸入したものを用了。ヘステル(正しくはヘステルス)読本とボック読本がその代表である。いずれも第一から第四読本まであり、第一読本はFibelと称し、先ずこれによって綴字・発音・習字を徹底的に学んだ。概して明治時代にドイツ語を学んだ日本人にはドイツ人と見紛うような見事な

筆跡の独文を書く人が少なくないが、これはドイツ文字・ラテン文字の習字に時間を懸けて練習したからであろう。ヘステル、ボック両読本は元来ドイツの小学校用教科書で、動植物や鉱物など事物についての短かい読章を取めたものである。この後に導入されたリュウベン・ナッケ読本(全5巻)も大体同様である。明治20年前後にはこれら初級読本に代わってHopf・Poulsiek, Kehrein, Boneなどのやや程度の高い諸読本が登場する。いずれもいかにもドイツ的と思わせる装幀の重量感のある本であるが、分厚いものだけに教科書としては余り普及せず、むしろ教師の間で多く使われたようだ。明治30年代に至るまで高等学校をはじめ諸校で最も広く用いられたのはエンゲリン読本(全4巻)で、五高生もこれによって学んだことは同書が多数保存されていることから分かる。このエンゲリン読本と並んで明治中期から後期にかけて普及したリーダーに、英国出版のブッフハイム編「近代ドイツ読本」(Buchheim: Modern German Reader)がある。2巻から成り、巻末に英語による注が付いているのが特徴で、東京帝国大学の雇教師E. ハウスクネヒトがドイツ語の授業で用いて以来、その優秀性が知られるようになった。内容もさることながら、分量も適切で、その上新書判に近い大きさだったので携帯に便利であったことも該書が普及した理由だろう。ちなみに、同じ編者によるドイツ古典文学の一つ「ハイネ散文集」(Heines Prosa)が約50冊ほど保存されており、どれもハルツ紀行のところには多くの書入れが見られるのは興味深い。ハイネ好きの教師が指定図書として買い揃え、生徒たちに講義したものであろう。明治末から大正初期にかけてクロン「ドイツ日常生活」(Der Kleine Deutsche)やBerlitz, Worman, Alge等の読本が登場した。Worman読本は特に陸軍幼年学校で好んで用いられたが、五高でも使われた。なお、明治10年代からの20年代にかけてドイツ語の教科書として万国史や地理書が用いられたが、その代表のウェルテル万国史とウェーベル万国史及びダニエルとサイドリッツの地理書も揃っていることを付記しておきたい。

文法書では先ずシェーフエル独逸文典が挙げられる。

既に明治5, 6年ごろから使われているが、盛行を見たのは明治10年代で、ヘステル読本と共にドイツ語教科書の2本柱であった。初級文法書でヘステルの第一を終えると直ちにこれに就いて学ぶのが普通であった。品詞論と文章論から成り、説明が懇切で、例文も多く初めてドイツ語を学ぶ者には最適であった。原書、翻刻本とも行われたが、翻訳も各種出ている。シェーフェル文典より詳しいのがハイゼ文典である。これには大文典(Leitfaden)と小文典(Schulgrammatik)があり、森鷗外は後者で学んでいる。明治20年代になると、米国のF. コンフォートの German Course 及び、これに少し遅れて導入されたE. オットーの独英会話文法など英文の文法書が高等学校を中心に広く用いられるようになった。ほかに五高では Wilmanns や Krause の文法書も教科書として用いられた。書簡文範(Briefsteller)では有名な Rammler や Campe のものがある。東京外国語学校その他で教えたE. ハーレルには Bausteine とか Lehrprobe と題する中級リーダーがある。

洋書に比べると日本のドイツ語学者の編著は少ないが、主なものに大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎の「独逸文法教科書」(三太郎文法として親しまれ大正中期まで使われた名著)、同じ編者の「独逸語入門」「独文読本」「新撰独逸名家詩文抄」のほか、崎山元吉「独逸学捷徑」、水野繁太郎「独逸語自修書」、国吉直蔵「簡明独逸文典」等がある。筆者の注意をひいたのは、独逸語学校蔵版の「独逸読本」(全3巻)「独逸

文典」「精撰独逸読本」(明治27~30年)が著者・高橋金一郎によって寄贈されていることだ。高橋は専門の医学よりも衆目の見るところドイツ語学に優っていた人である。「独逸文典」は日本人の手になる最初の詳しい文法書で詞論と文論から成り、「独逸読本」は前記 Buchheim 読本の影響を受けているが、今見ても立派なものだ。独逸語学校は明治19年に東京・本郷に開設された私立のドイツ語学校で、若き日の高橋や土肥慶蔵、藤代禎輔、登張竹風(信一郎)などが教えたところである。

五高のドイツ語教師たちの著作も勿論ある。初代のドイツ語教授を務めた賀来熊次郎の「独逸語学階梯」「独逸語学階梯案内」「Schillers Historische Skizzen」をはじめ、後年我が国のドイツ語界に大きい足跡を印した青木昌吉の「邦語独逸文典」「邦語独逸文章論」(いずれも博文館・帝国百科全書の中)もある。わざわざ「邦語」と断っているのは奇異に思われるかも知れないが、当時は洋書を用いる場合が多かったのである。ほかに、後に広島陸軍幼年学校教授になった三谷金女三の「独和二対実用会話篇」、五高教授を辞め初代福島市長に転身した二宮哲三の「独逸文典原理」、新教神学校の出身で、強烈な個性で知られ、後に一高教授になった丸山通一の「独逸音声学大意」(皇国学生必読)などもある。五高ドイツ語科のシンボリック的存在だった小島伊佐美も文法書や読本を数種残している。第五高等学校龍南会編「新撰独文読本」などもある。

以上明治時代の蔵書を中心に紹介した。これらは今では顧みる人もなく埃をかぶっているが、それでは惜しい。現在でも教育研究の資料として活用できるはずだ。とにかく、こうした重厚でオーソドックスなドイツ語の教科書をはじめ辞書や参考書を多数所蔵しているのは本学の誇りだ。五高の遺産は決して漱石やハーンだけではない。
(かみむら・なおき 教養部教授 独逸学史)



(五高記念資料館)

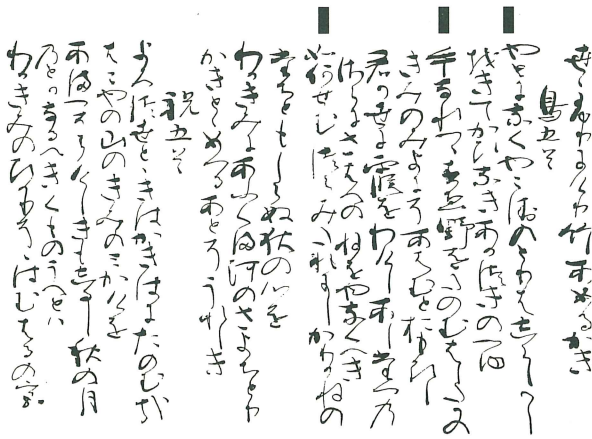
熊本大学附属図書館寄託 永青文庫の貴重書（一）

「俊成卿定家卿両筆」一軸

荒木 尚

藤原定家は応保2年（1162）藤原北家長家流の顯広（のちに俊成と改める）の2男として生まれた。母は女房名を美福門院加賀と言った女性である。侍従、左近衛権中将などを経て公卿に列し、参議、治部卿・民部卿を歴任、権中納言正二位を極官位として出家、仁治2年（1241）80歳で没した。自恃の念強く、官位・経済ともに不遇をかこち続けたが、天賦の歌才に加え、父母の薫陶よろしきを得て、早くから旺盛な作歌活動を続けて天才児の名声をほしいままにした。『新古今和歌集』の撰者として中心的役割を果たし、秀歌選『小倉百人一首』もある。『拾遺愚草』はそのような定家の自撰家集である。

[I]



鳥五首
世、ふりにけり竹あめるかき

やとになくやこゑのとりはしらしかし
きてかひなきあかつきのつゆ
手なれつ、すゑ野をたのむはしたかの
きみのみよにそあはむとおもひし
君か世に霞をわけしあしたつの
さらにさはへのねをやなくへき
如何せむつらみたれにしかりかねの
たちともしらぬ秋の心を
わかきみにあふくま河のさよちどり
かきと、めつるあとそうれしき
祝五首
よろつ世と、きはかきはにたのむ哉
はこやの山のきみのみかけを
(以下略)

[I]

『拾遺愚草』藤原定家自筆

定家の自撰家集で、3754首の歌を収めている。掲出の歌は、「正治二年院初度百首」のうち、「鳥」題5首の部分。歌頭のところどころに銀紙を細く切った付箋が付されている。鎌倉初期。列帖装3帖。縦21.6センチ、横15.0センチ。京都市・冷泉家時雨亭文庫蔵。

[I]は冷泉家に蔵される重要文化財指定の定家自筆『拾遺愚草』の中の「正治二年院初度百首」の部分である。この百首和歌の詠進に際しては、興味尽きない事情が秘められていた。それを伝える貴重な資料が細川家に蔵されている。[II]「俊成卿・定家卿両筆」1軸がそれである。これは定家の「正治二年院初度百首」のうち、「鳥」題の5首の自注入り草稿に俊成が評語を書き加えて返した^{かんべんじょう}勘返状（往信の行間に返信を記した書状）である。

正治2年（1200）後鳥羽院は本格的な和歌活動を始め、最初の大規模な催しとなる百首歌を企てた。「正治二年院初度百首」といわれるものである。定家はこの百首歌の作者に加えられて詠進し、後鳥羽院に認められて宮廷歌人としての地位を確立するのだが、当初、定家は作者からはずされていた。この百首和歌を推し進めたのは実力者の内大臣源通親と六条家の藤原季経で、評価の定まった老齡歌人を中心とした人選を行ない、定家を締め出したのである。これには定家らが新しい詠風を求めて活発な作歌活動を展開するにつれ、旧派の歌人として新風を誹謗するようになった季経との対立があった。そこで老俊成が動き出した。仮名奏状を院に奉って、定家らを作者に加えるよう訴えたのである。これが効を奏して、定家らが百首歌の作者に加えられた。そして詠進した和歌が後鳥羽院の叡感を得て内昇殿をゆるされることになった。このように院を感動させ、定家を院と結びつける契機となったのが、述懐歌を含む「鳥」題の5首であった。

この5首は正治2年8月23日の夜から24日の午前中にかけて、俊成・定家父子のあいだにあわただしく交わされたものらしい。これを見ると、与えられた「鳥」の題に定家がどのような思いをこめようとしたかを具体的に知ることができる。最初の歌では、大江朝綱の詩句を踏まえて、宮廷に出仕するあてもない不運を涙し、次の問題の歌「きみがよに」では、鶴を詠んで、かって後鳥羽院の御代に昇殿をゆるされたのに、今上帝の御代では沈淪をかこたねばならないのでしょうかと訴えている。この述懐歌（不遇訴嘆の歌）は、定家が24歳の時、殿上で自分のことをからかった源雅行をしそく脂燭（照明具）で打って除籍され、憂えた俊成が提出

した訴状のなかの歌

あしたづの雲路まよひし年暮てかすみをさへやへだてはつべき

などを思い浮かべて詠んでいるのである。第3首（てなれつゝ）では、かつて養鶏掛として奉仕したことを思いだし、養鶏をはし鷹の飼育に変えて歌い、後鳥羽院のもとでの忠勤を期待していたという意味をこめてゐる。第4首目は雁を詠む。近衛府の中国での呼称を「羽林」ということから、左近衛府の少将にとどまっている自身を雁がねにたとえ、列にはぐれて飛びたてないでいるあわれな雁の「秋のこゝろ」即ち、愁いを歌っている。そして最後の1首は千鳥の歌で、後鳥羽院の御代に会えて、百首歌を後世に書きとどめることができたことを喜んだ詠である。定家の注記によれば、院が命じた詠進の条件には、雁や千鳥は詠んではならないという禁制があったという。ありふれた素材に対する「制仰」であったと考えられるが、定家はこれを犯して詠んだ。しかし気掛りであったらしく、「そらしらずしてや候べからむ（知らなかったふりをしてよろしいでしょうか）」と俊成に相談している。それに対して俊成は合点（〳）を付して同意した。この最後の2首を特に大切に思い、これ以外には詠めそうにないと言う定家の思い入れをおもんばかつての許容であったの

だろう。さらに定家の注記は続く。述懐の心を詠むことは院の意向ではないけれども、雁・千鳥や述懐など「狭事」に拘泥してゐては、歌道のために遺憾なことであると言う。俊成は定家のこのような真摯な気持ちを汲んで、ここでも合点を加えて賛同しているのである。

「鳥」題については、愛禽家として知られる後鳥羽院の意向というものも考えられようが、それよりもこの勸返状は、後鳥羽院に追従して、珍しい素材に走ろうとする歌壇の皮相な傾向に立ち向かおうとする定家像を伝えている。そして、院の「制仰」をあえて無視して詠んだ「鳥」題5首が、やがて後鳥羽院仙洞を中心とする歌壇に定家を押し上げてゆくことになるのである。

ところで、この掛幅1軸については、「忠興公御家譜」のなかに「俊成・定家両筆従 家光公寛永十六年十一月御拝領」とある。また『寛政重修諸家譜』には、「（寛永）十六年十一月十九日、また御手づから点茶を賜ひ、事終りてのち俊成・定家両筆の一軸と宋の無準が墨跡とを掛をかれ、此二軸は常に愛玩せさせ給ふといへども、好みに応じてその一をたまはるべきむね恩命あるにより、こふて両筆の一軸を拝賜す」とあって、この一軸が細川家に伝来した経緯を知ることができる。

（あらかし ひさし 文学部教授 国文学）

[II]

<p>内府哥 述懐多リキ</p> <p>凡以述懐題被止題ニ、述懐之心 詠之、旁雖有其憚、此鳥題凡 一切不可叶候之間、如此詠候、又偏以狭事 為先者、為道遺恨候之故也</p>	<p>鷹与鷺之間 一ヲ可得心歟</p> <p>行 乱</p> <p>いかにせんつらみだれにしかりがねの たちどもしらぬ秋のこゝろを わがきみにあぶくまがハのさよちどり かきとゞめつるあとぞうれしき</p> <p>鷹千鳥已停止候云、、然而此二首 殊大切思給候、此外凡可構出とも 不覚候、制仰たゞそらしらず してや候べからむ</p>	<p>勝歟</p> <p>驚可</p> <p>依之詠之</p> <p>被結番、供奉其事 長房 信清 範光 保家 定家</p> <p>文治之比、禁裏御壺被飼鷄、以近臣 依之詠之</p>	<p>一、俊成卿定家卿兩筆 一軸</p> <p>鳥</p> <p>やどになくやごゑのとりハしらじかし おきてかひなきあか月のつゆ</p> <p>朝綱卿詩云</p> <p>家鷄不識官班冷 依舊猶催報曉声 きみがよにかすみをわけしあしたづの さらにさわべのねをやなくべき てなれつゝ、すゑのをたのむハしたかの きみのみよにぞあハんとおもひし</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

（原文の写真は表紙にあり）

犬も相手にしないし 猫も匂いを嗅がない

金原 理

昨年10月17日から20日まで4日間、中国の天津師範大学で「中日比較文学国際シンポジウム」と言う国際会議が開かれた。このシンポジウムに招待を受けたので、前後の旅行日を含めて一週間、熊本を留守にした。

会議には50名ほどの出席があり、日本からは9名が参加した。天津郊外の、湖を借景に取り入れた瀟洒なホテルが会場として提供された。会議場にはゆったりとしたソファがコの字型に並べられ、銘々の前の小型のテーブルにはお茶の入った蓋つきの大きな湯飲みが用意され、それを楽しみながら会が進められた。私は「呉越同舟」と言う四字熟語のもとにもなっている越の国の戦術家、范蠡はんれい—その伝記は中国の歴史書『史記』に詳しい—の生涯について触れ、それが日本の文学に取り入れられた場合、ある変質が起こることについて述べた。ただこのシンポジウムの報告は別の機会に譲るとして、ここでは滞在中に見聞した愉快な一事を披露しようと思う。

シンポジウムのプログラムは4日とも午前中に組まれていて、午後は市内見学や遠方へのエクスカーションに当てられ、夜は大学主催のレセプションが行われたりした。この午後の見学の折、移動のバスの車窓から奇妙な看板が目飛び込んできた。それには猫の絵に「猫不聞」と描かれているのである。しかもこれを掲げた建物の入り口には餐庁と書いてある。餐庁とは日本で言えばレストランのことだが、このような看板



山査子売り

山査子の実を串に刺してアメで固めたものを、わらづとのようなものに刺して自転車の後に積んで売り歩く。

を出した店は一軒ならずあった。

3日目の午後は城内にある旧市街に出かけ、昔からの店を見て歩いたり買い物を楽しんだりして、夜には天津の老舗の集まっている、食堂街にある一軒の店に案内された。そのレストランの店名は「狗不理」と言う。ところがこの店の向かいを見て驚いた。「猫不聞」と言う看板がここにも掛かっているではないか。「狗」と言う字が日本語の「犬」にあたることに間もなく気がついたが、とすると今から入ろうとしているレストランではいったいどんな料理が食卓に供されるのかと、なんとなく異な気持ちになった。それで同行の中国の研究者におそろおそろ尋ねてみた。

「この『狗不理』とはどう言う意味ですか。」

「これですか。これは、犬も相手にしないと言うことですよ。」

「では、『猫不聞』は。」

「あれは、猫も匂いを嗅がないと言う意味です。料理屋の看板なのにおかしいですね、ハッ ハッ ハッ」と、一笑に付されてしまった。

ともかくも百聞は一見にしかず、「狗不理」の店に入った。種々に手の混んだ前菜とともに卓上に並んだのは、肉饅頭であった。日本で店頭で並んでいるものよりいくぶん小振りである。この店では中に詰めるものを変えて、12種類卓上に並ぶと言う。じつに美味なのだが、これも旨い前菜を好い加減詰めこんで、ビールで大きくくなったお腹にはとても12個も入らない。8個ほどで打ち止めにしてしまった。

「狗不理」も「猫不聞」と言う言葉も、このようにごくつまらない物、とるにたらない物と言うほどの意味であるが、それをものみごとに逆手にとって商標とする、そのあざやかさに舌を巻いてしまった。

ちなみに、「猫不聞」は水餃子の店である。これも一度は賞翫すべきであったが、4日という短い滞在期間ではその機会を作ることはできなかった。

帰国後、中国の留学生から、「狗不理」も「猫不聞」も天津から次第にチェーン店を全国に延ばしはじめていると、聞いた。

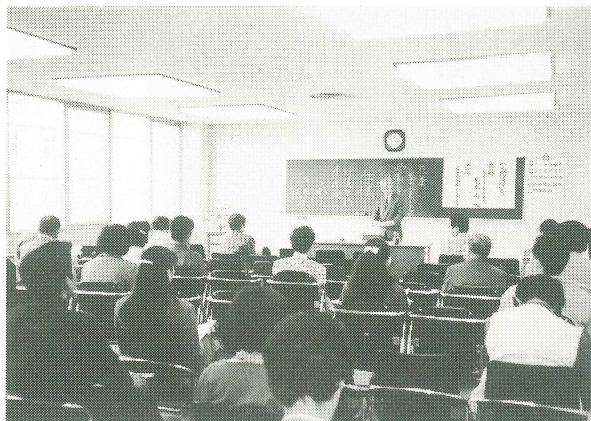
(きんばら ただし 文学部教授 比較文学)

第12回 特殊資料展・講演会を開催

中央図書館では平成7年11月3日(金)から5日(日)まで、学園祭《熊粹祭》の日程に合わせて『第12回特殊資料展及び講演会』を開催しました。今回は「永青文庫の文学書」をテーマに、財団法人永青文庫が所蔵し、図書館に寄託の資料の中から、県・市指定重要文化財を含む27点を展示しました。

主な出品資料は、細川幽齋公が家光公より拝領の「俊成卿定家卿両筆」(パネル展示)、菅原道真の撰と伝えられる「新撰万葉集」、藤原定家が選進し定家自筆本と伝えられる「新勅撰和歌集」、「歌合類聚(十種)」などの和歌文学や、平安時代前期の代表的な歌物語である「伊勢物語」、「源氏物語」、軍記物語の最高傑作とされる「平家物語」などの物語文学のほか、「幽齋公三斎公御筆謡本」、「豊後風土記」など、普段はなかなかお目にかかれない貴重なものばかりで、参観者の間からは感嘆の声が上がっていました。

また初日の11月3日(金)には、文学部荒木 尚教授の「永青文庫の文学書」と題する公開講演会が行われました。講演は、俊成・定家親子の筆になる「俊成卿定家卿両筆」の成立とその背景を考察するもので、格調高いながらも謎とときに似た内容の展開に聴衆は魅了されたようでした。(情報サービス課 参考係)



保健医療の国際交流に協力

医学部分館は現在、国際協力事業団の依頼による開発途上国保健医療専門家のための集団研修「第6回農村近代化過程の健康障害対策Seminar on the Control of Health Hazards in the Modernizing Process of Agriculture and Rural Areas」コース(財団法人国際保健医療交流センター主催H.7.10.2~H.7.12.4)に協力しています。

この研修は、「開発途上国の保健省、また国のレベルの農村保健担当者に、日本における過去50年の研究と対策、また各種の経験を提供し、各国が夫々の国情に適した農村保健計画を実施するにあたり、立案と対策並びに具体的な問題解決のための技術導入に関する援助を図る」ことを目的として、さまざまな条件に恵まれている熊本市で平成元年から開催されているものです。

今回、その一環として平成7年10月18日(水)世界8ヶ国からの海外研修員9名を含む計11名が来館、医学部分館の業務内容等に関する見学研修が行われました。

今後とも他の機関とともに、各国の研修生におおいに利用してもらい、研修の支援に協力していきたいと考えています。

(医学部分館 運用係)

本学教官寄贈著書紹介

中村 青史 教授(教・国文学)

民友社の文学

中村青史著

三一書房 1995.12

前田 浩 教授(医・微生物学)

野菜はガン予防に有効か:酸素

ラジカルを巡る諸問題 体に有害な酸素

ラジカルを除きガン予防・老化予防をめざして

前田浩著

菜根出版 1995.1

海老原 遙 教授(教・教育史学)

教育と労働 いまクループスカヤを読む

海老原遙著

新読書社 1995.5

小松 裕 助教授(文・文化史学)

田中正造 二一世紀への思想人

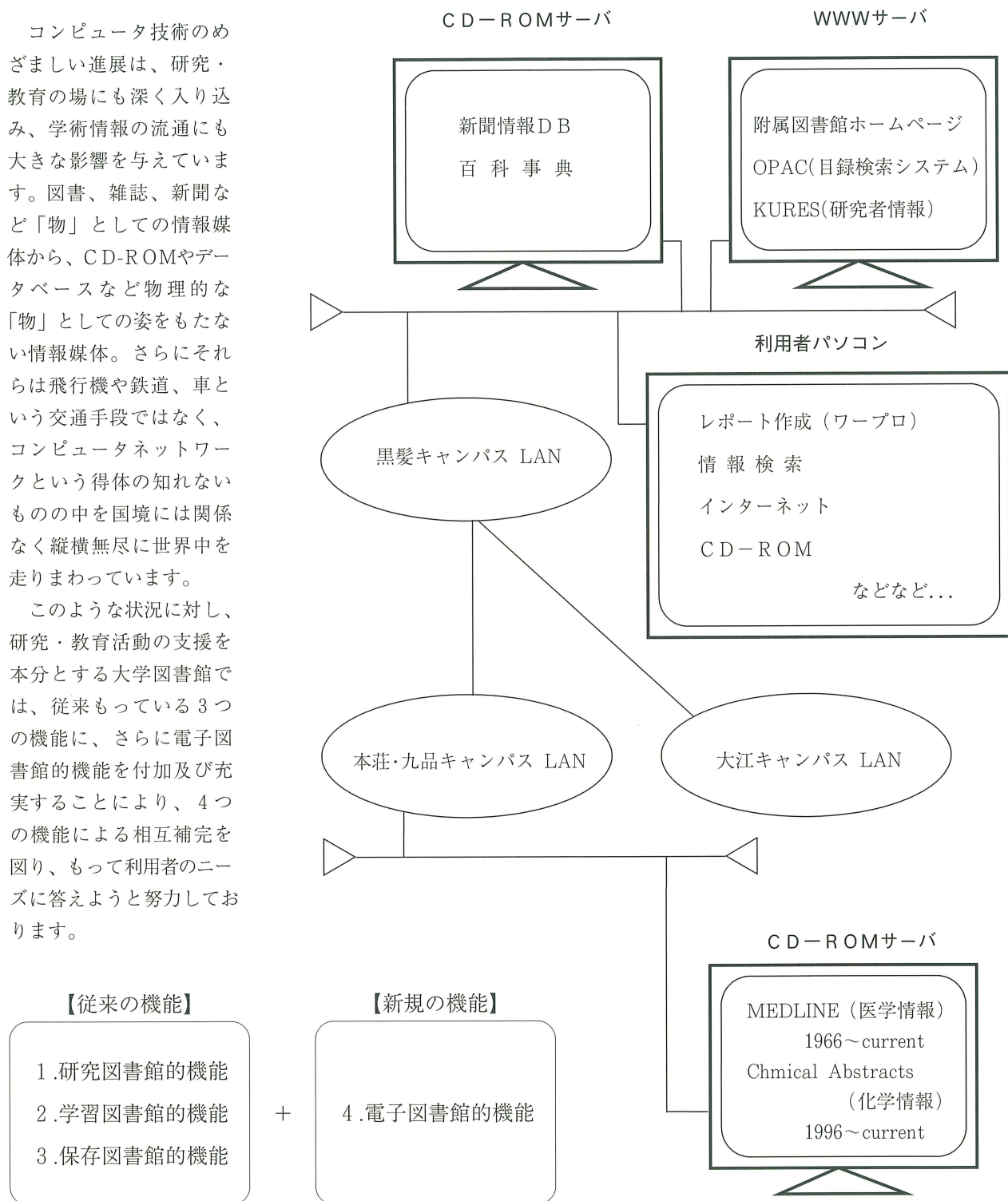
小松裕著

筑摩書房 1995.9

附属図書館ネットワークサービス

コンピュータ技術のめざましい進展は、研究・教育の場にも深く入り込み、学術情報の流通にも大きな影響を与えています。図書、雑誌、新聞など「物」としての情報媒体から、CD-ROMやデータベースなど物理的な「物」としての姿をもたない情報媒体。さらにそれらは飛行機や鉄道、車という交通手段ではなく、コンピュータネットワークという得体の知れないものの中を国境には関係なく縦横無尽に世界中を走りまわっています。

このような状況に対し、研究・教育活動の支援を本分とする大学図書館では、従来もっている3つの機能に、さらに電子図書館的機能を付加及び充実することにより、4つの機能による相互補完を図り、もって利用者のニーズに答えようと努力しております。



上の図は、すでにサービス稼働中のものと、近々にサービス開始予定のネットワークサービスの概念です。総合情報処理センターや関係各位のご理解なくしては実現不可能なものばかりです。情報の発信部局として、

また、少しでも使い易い図書館として発展するよう、利用者の皆様方のご理解をお願いいたします。

人事異動

- 平成 7.10.1 情報サービス課閲覧係
秋 吉 陽一郎
(情報管理課受入係)
- 〃 情報管理課受入係
川内野 祐 子
(情報管理課目録係)
- 〃 医学部分館整理係
中 尾 康 朗
(情報サービス課閲覧係)
- 〃 情報管理課目録係に採用
伊 波 ひとみ
- 〃 医学部研究協力係
林 田 善 美
(医学部分館整理係)

資料トピックス

オーディオ・ビジュアル資料としてLDやビデオを多数受入れ中です。「アダムス・ファミリー(LD)」、「カサブランカ(LD)」等々のワクワク名作映画作品、「シェークスピア全集(ビデオ)」やNHKで放映された「日本百名山全20巻(ビデオ)」など、チョウたのしい教養作品がそろいましたので、是非ご利用下さい。

編集後記：文庫といえば普通苗字雅号を取って何々文庫と称しているが、永青文庫の「永」は細川家ゆかりの永源庵(京都市建仁寺の塔頭)から、「青」は近世初代幽斎ゆかりの青龍寺城(京都府長岡京市)からきています。この当館寄託の永青文庫所蔵資料の解説を今回から4回に分けて文学部荒木教授にお願いし、掲載する予定です。ご期待下さい。

一方、旧館書庫で埃にまみれている五高時代の図書に光をあてられた上村教授の一文は普段忘れがちな足元に目を向けられた労作であります。有難うございました。

日誌(平成7.9.1~12.28)

- 8.31 九州地区医学図書館協議会(於宮崎)~9.1
9. 6 熊本県図書館オンライン・ネットワーク説明会(熊本県立図書館)
- 9.11 CD-ROM 説明会(Cheical Abstracts)
- 9.25 図書館委員会
〃 附属図書館係長会議
- 9.27 第15回大学図書館研究集会(於東京)~30
- 9.28 平成7年度九州地区国立大学図書館協議会~29 実務者連絡会議(於北九州)
10. 3 古典籍研修会
10. 5 九州地区国立大学附属図書館情報管理課長~6 会議(於鹿児島)
〃 第8回国立大学図書館協議会シンポジウム(於大阪)
- 10.17 古典籍研修会
- 10.26 附属図書館ホームページ公開
- 10.27 附属図書館係長会議
11. 1 学術雑誌総合目録和文編1996年度版説明会(於福岡)
11. 3 第12回熊本大学附属図書館特殊資料展~5
11. 7 古典籍研修会
- 11.10 日本薬学図書館協議会九州地区会議~11(於福岡)
- 11.20 学術情報センター笹川課長講演会(中央館)
- 11.21 古典籍研修会
12. 5 平成7年度インターネット講習会~6(於東京:学情)
〃 古典籍研修会
- 12.15 消防訓練
- 12.19 図書館委員会
〃 古典籍研修会
- 12.25 附属図書館係長会議

東光原一熊本大学附属図書館報一第13号

平成8年2月

編集発行 熊本大学附属図書館

〒860 熊本市黒髪2丁目40番1号

TEL (096) 342-2273

FAX (096) 345-9087